

誰でも自由に参加できます



都留フィールド・ミュージアムの活動には、市民はもとより誰でも自由に参加できます。現在、下記のような取り組みに、学科や学年の枠をこえて多くの学生が参加しています。卒業生は、実地の学びを活かして教員や公務員、新聞社、出版社など幅広い分野で活躍しています。地域の人びととの交流や、自然観察、動植物の保全、冊子の編集・出版などに興味や関心のあるかたは、都留文科大学地域交流研究センター事務局まで気軽にお問い合わせください。



○機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行
学生が主体となり、都留フィールド・ミュージアムの機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行をしています。地域に出て取材をし、記事にし、表現する。こうした一連の実地による学びは、大学で学ぶ理論や知識をさらに深く、より豊かなものにしていきます。学科、学年を問わず、誰でも自由に参加できます。



○自然観察会のスタッフ
都留フィールド・ミュージアムでは、年に4回～5回、市民対象の自然観察会を開催しています。親子での参加が多いのが特徴です。スタッフとして参加した学生は、自ら観察会を企画・運営できる実践的な技術も身につけていきます。またこの観察会は、大学の環境ESDプログラム(注)とも連携しています。



○「キャンパスにリスを呼ぶ会」
キャンパスの周りには、リスやムササビ、野ネズミをはじめさまざまな動物が暮らしています。こうした動物たちと出会うための工夫をしながら、会員同士が互いに交流し、自然との共生について考え、喜びや楽しさを分かち合うことを目的とした会です。多くの教員・学生・職員・市民が参加しています。

(注) 環境ESDプログラムとは：国連が推進する「持続可能な発展のための教育 (Education for Sustainable Development)」のうち、主に環境問題・環境教育について体系的に学ぶための本学独自の履修プログラムです。詳しくは学生便覧をご覧ください。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。

都留フィールド・ミュージアムのフィールド：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしません。とくに都留を拠点として富士山とその山麓、桂川(相模川)流域に注目して活動していきます。

お問い合わせ：地域交流研究センター事務局
Tel. 0554-43-4341 (内線 441)

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
ckouryu@tsuru.ac.jp

2014年3月24日発行
(C) 都留文科大学地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
タイトル：工藤真純(本学卒業生・元「フィールド・ノート」編集部)
絵：成瀬洋平(本学卒業生・元「フィールド・ノート」編集部)
編集：「フィールド・ノート」編集部

都留文科大学地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム

Tsuru Field Museum

へようこそ



都留文科大学のキャンパスでは、動物園や博物館ではみられない生き生きとしたムササビにいつでも出会えます。都留フィールド・ミュージアムでは、地域でこのような生きものや人びととの出会いを楽しみ、ていねいに観察し、ものごとからじかに「学ぶ」ことを大切にしています。そうして、自然(nature)との関わりや、私たちの暮らし、文化のありようなどについて、みなさんとともに探究していきます。

おもな取り組み

私たちは、**地域全体を博物館**ととらえ、市民とともに地域を観察し、調べ、記録し、学び合うさまざまな取り組みをしています。このような実践を通して、領域を越えたあたらしい教育や研究の芽を大切に育て、「人間探究」を目的にかかげる都留文科大学らしい活動をしていきます。そのなかから代表的な活動を紹介しします。



大田堯元学長（左）と交流する『フィールド・ノート』編集部の学生。大田先生は、埼玉県で「見沼フィールド・ミュージアム構想」を実践されており、現在でも交流がつづいています。



2010年、東京国立科学博物館と本学との共催による「大哺乳類展」では、資料（標本）の展示だけでなく、本学の学生も解説員として活躍しました。入場者は30万人を超えました。

生きものに親しむキャンパスづくり



「ビオトープ事業」では、キャンパスとその周辺にムササビやリス、チョウやトンボなど多様な生きものが訪れる環境を学生が中心となって整備しています。リスとの出会いを楽しむ「キャンパスにリスを呼ぶ会」、ムササビの生態を多くの人と観察し解き明かそうとする「ムササビ・ライブカメラ事業」、テントウムシの越冬の様子から、自然の動向をみんなで見守っていこうという「テントウムシの越冬を見守る会」の活動も行なっています。

研究・教育活動



キャンパス周辺の身近な自然を、市民そして子どもたちと観察し、学び合う観察会を開催しています。学生がスタッフとなり毎回、工夫を凝らした解説と案内をします。市民や子どもたちから学ぶことも多く、観察を通して楽しい交流の場が生まれています。また、地域の小学校と連携した総合的学習の時間への参加や、本学の美術教室とともに親子を対象としたイベントを開催するなど、本学の研究・教育の特色を活かした活動をしています。

地域の現代的な課題に取り組む



都留は今も昔も自然豊かな場所です。しかしその一方で、カワラナデシコやカジカなどのように昔はたくさんいたけれど、年々数が減ってきている生きものがあります。あるいは、もともと数が少ない上にさらに減少してきている生きものもあります。このような絶滅が危惧される地域の生きものを保全するために、学生と教職員、地域の人びとが連携協力して、研究・活動を行なっています。このほか農業や林業、エネルギー問題にも取り組みます。

地域を調べ、記録し、学び合う



都留フィールド・ミュージアムでは、地域の自然や人びとの暮らしの知恵に学ぶことが大切だと考えています。そこで、現場に出かけ、ていねいに観察し、記録し、その成果を共有する活動をしています。その一つが、学生が主体となって編集し、発行する『フィールド・ノート』です。年4回発行されます。この冊子は都留フィールド・ミュージアムの機関誌として、県内外の多くの読者に届けられています。

地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する



これからの暮らしや文化のありようを考えるうえで、地域の過去に学ぶことは重要な意味をもちます。そこで都留フィールド・ミュージアムでは、「地域の資料や記憶の保管庫」として、地域で過去に撮影された写真や生活の記憶、自然関連の資料（標本）を収集、保存、活用する活動をしています。それが「オープン・アーカイブ事業」です。都留市の「ミュージアム都留」と連携した資料の収集や展示活動も始まりました。

展示・出版活動



私たちの活動の成果を多くのかたがたと共有するため、富士急行線都留文科大学前駅の駅舎を博物館の分館として展示活動をしています。また、市立図書館と連携した展示も行なっています。こうした展示作業には、多くの学生が参加しています。成果を誰もが活用できるよう、地域の自然マップやキャンパスの自然を記録する「フィールド・キャンパスだより」を発行するなど、出版活動にも力を入れています。

*都留フィールド・ミュージアムの出版物は、バックナンバーを含め地域交流研究センターにあります。気軽にいらしてください。

1980年

○大田堯元学長による「都留自然博物館」構想の提案

○今泉吉晴名誉教授による「都留市フィールド・ミュージアム」構想の提案

この両氏による構想は、現在の都留フィールド・ミュージアムの実践・思想の原点ともなっている。

2003年

○地域交流研究センター発足。センターに、フィールド・ミュージアム部門が位置づけられる。地域交流研究センターは、都留文科大学と地域をつなぎ、地域づくりのさまざまな活動と研究に取り組むための拠点として設置された。現在、フィールド・ミュージアム部門、発達援助部門、暮らしと仕事部門がある。

2007年

○平成19年度文部科学省「現代的教育二ス取組支援プログラム」に採択される。「山里・町をつなぐ実践的環境教育への取組：フィールド・ミュージアムへようこそ！」と題し、①自然環境教育の指導力をもつ小学校教員の養成、②コーディネーター的要素をもった地域の環境教育の担い手の養成、を目的とした。

2010年

○国立科学博物館との共催による「大哺乳類展」では、「森からの便り」と題したコーナーに資料（標本）を出展。本学学生が解説員を担当した。ムササビの生態研究など30年近い実践とその探究の成果の発表の場、全国との交流の場となった。

2013年

○都留市まちづくり交流センター発足。さらなる交流の促進を目的として、この施設のなかに、地域交流研究センターのサテライト（分室）を設置した。